

第 76 回 愛知県泌尿器科医会例会 特別講演 抄録

間質性膀胱炎の診断・治療 update

松川宜久（まつかわよしさ）

名古屋大学大学院医学系研究科泌尿器科学

間質性膀胱炎は、膀胱に関連した慢性の疼痛、圧迫感、不快感などの症状を特徴として、生活の質に大きく影響を及ぼす疾患である。また泌尿器科専門医であっても、その診断や治療に苦慮することが多い。2019 年 4 月に 12 年ぶりに間質性膀胱炎・膀胱痛症候群診療ガイドラインが改訂され、膀胱鏡検査におけるハンナ病変の有無に従って、間質性膀胱炎と膀胱痛症候群の区別がなされた。これら両疾患は、病理学的所見や遺伝子解析所見も異なっており、実臨床においても全く別の疾患として捉えてアプローチすることが、治療成功の鍵となる。そのためには、膀胱鏡検査でハンナ病変の正確な評価に加えて、膀胱上皮内癌や慢性膀胱炎など混同しうる疾患との鑑別が重要になってくる。

また、間質性膀胱炎に対して保険収載されていた治療法は、これまで水圧拡張術のみであったが、2021 年 4 月にジメチルスルホキシドの膀胱内注入療法が、2022 年 4 月には、膀胱水圧拡張術とハンナ病変切除・焼灼術を組み合わせたハンナ型間質性膀胱炎手術が新たに保険適応となった。しかしながら実臨床においてどのような症例に対して、どの治療法を選択すべきか、さらに膀胱内注入療法と外科的治療、あるいは内服治療の使い分けなど不明な点も多い。

個人的には、効果的な間質性膀胱炎・膀胱痛症候群診療のためには、それぞれの地域における病診連携の充実化が重要であると考えている。本講演では、実臨床における間質性膀胱炎の診断、治療に加えて、病診連携にむけた取り組みについて概説させていただく。